

【開催趣旨】

広島県呉市安浦町出身の南薫造（1883・明治16—1950・昭和25）は、近代日本洋画史を代表する画家の一人です。1907（明治40）年、東京美術学校卒業後に渡欧。イギリスやフランスに滞在し、人物画や風景画の研鑽を積みました。帰国後は文展で連続受賞を果たすなど、新進作家として活躍。印象派風の光の表現を取り込んだ明るく豊かな色彩による、穏和な風景画で画壇での評価を築きます。

画家の没後70年を記念して開催する本展は、初期から晩年までの画業の全貌を紹介する初の大規模な全国巡回展です。ヨーロッパ留学時代の作品や、文展や帝展、日展出品作、アジア各地に取材した風景画をはじめとする代表作を網羅し、豊かで温もりある色彩に彩られた清新な作品をとおして画業をたどる、決定版の回顧展です。

※会期中に、**一部展示替**を行います（前期：4月20日～5月16日、後期：5月18日～6月13日）（展示期間を特に記していない作品は、全期間展示します）。



《坐せる女》1908年 油彩・画布 広島県立美術館

第4回文展受賞作。柔らかな肌や軽やかな髪、硬質な花瓶といった質感の描き分けは見どころのひとつ。温雅な画趣と色遣いで好評を博した、画業初期の代表作。

【展覧会の構成】

第1章 初期 美校時代



《瀬戸内海》1905年 油彩・画布 東京藝術大学

作者が幼少期に訪れていた柏島を望む風景。夏に帰省した際に描き、白馬会展に出品。初入選を果たすとともに、美校の買上となった作品。

南薫造が、東京美術学校（美校）に入学するのは1902（明治35）年。それに先立ち、広島市内で送った中学時代は、初めて「西洋画」を目にするとともに、印象派など欧米の美術情報や学術書に触れ、西欧文化に対する意識を育んだ時代でもありました。

美校では、フランスから帰朝して間もない岡田三郎助（1869–1939）に学び、余暇には静物や風景写生を重ねて制作に励みました。公の展覧会に初めて応募した1905（明治38）年の白馬会展では、3点の入選作のうち2点が買上となるなど、画壇で恵まれたスタートを切っています。全国的な水彩ブームが起こった明治30年代半ばに美校に進んだ南は、生涯、水彩画家としても活躍しますが、美校卒業後の最初の留学先として選んだのも、水彩画の本場であるイギリスでした。

第2章 留学時代

1907(明治40)年9月、ロンドンに到着した南は、サウス=ウェスタン・ポリテクニクに入って人物画を学び始めました。さらに、サウス・ケンジントン博物館(現・ヴィクトリア&アルバート博物館)や大英博物館に足繁く通い、イギリス絵画だけでなく、エジプトやアジアの古代芸術を模写する一方、各地に写生にも出かけています。とりわけ、モルトン村やウィンザーは主要な制作地で、白瀧幾之助(1873-1960)や富本憲吉(1886-1963)ら同行した友人と交友を深めつつ、充実した作品を生み出しました。

留学も後半を迎えた1909(明治42)年7月には、パリに拠点を移します。有島生馬(本名・壬生馬、1882-1974)とモデルを共有して制作するなど4か月に及ぶ滞在後、ヨーロッパ各地を巡遊。ゴシック期やルネサンス期の絵画、また印象派の優品に触れた後、アメリカ経由で1910(明治43)年4月に帰国します。帰国後に発表した滞欧作は注目を集め、画壇での活躍につながっていきました。



オックスフォードシャーのモルトン村を描いた作品。月光に照らされた白壁や窓からこぼれる明かりなど、光の変化を丹念に描いた滞欧期の代表作。

《白壁の農家》1908年 油彩・画布 広島県立美術館



《うしろむき》1909年 水彩・紙 広島県立美術館【前期展示】

白瀧幾之助や富本憲吉らとウィンザーに滞在した際の宿の少女を描いた作品。愛らしい立ち姿を、透明感のある水彩ならではの色彩で瑞々しく表現。



《少女》1909年 油彩・画布 東京国立近代美術館

パリで制作した作品。明るい色彩と点描表現に、印象派の影響が感じられます。「南薫造・有島壬生馬滞欧記念絵画展」の出品作。

press release

第3章 帰国後の活躍

帰国後の南は、滞欧作を多数発表した「南薫造・有島壬生馬滞欧記念絵画展」で画壇の注目を集めると、つづく第4回文展では、《坐せる女》で三等賞を受賞。以後、不出品の8回展を除き、9回展まで連続受賞し、10回展からは若くして審査員に抜擢されるなど、新進作家として歩み始めます。文展には主に油彩画を発表する一方、水彩画や日本画、さらには創作版画の先進例として知られる、自画自刻自摺*の木版画も制作しています。

1910年代半ば頃からは新たな方向性を模索し始め、力強い描写や濃密な色彩表現などが見られる作品も描きますが、1930年代を迎える頃には画風が確立。豊かな色彩と伸びやかで平明な描写を得て、帝国美術院会員として画壇の中心で活躍する一方、東京美術学校で後進も指導。東京を拠点に長年活動を続けますが、戦争が生活を覆い始めるなか、1944(昭和19)年、郷里に疎開しました。

この章では、郷里を描いた文展、帝展出品作のほか、創作版画、アジア各地で描いた清新な水彩画などを紹介します。

* 絵師・彫師・摺師の分業で制作する浮世絵などと異なり、下絵の作成、彫り、摺りを全て自分一人で行うこと。



第6回文展で最高賞の二等を獲得した代表作。細かいタッチを重ねて、初夏の明るい陽光が降り注ぐ、瀬戸内の麦刈りの情景を描いています。

《六月の日》1912年 油彩・画布 東京国立近代美術館



《夏》1919年 油彩・画布 ふくやま美術館

郷里の神社の森にあった老木を主題に描いたと伝わる作品。余白の少ない画面構成や鮮やかな色彩が、濃密な夏の息吹を伝えます。第1回帝展出品作。



《水辺彩屋》1939年 水彩・紙 広島県立美術館【後期展示】

中国・蘇州に取材した作品。運河が町をめぐる、特色ある同地の景観を巧みな描写で表現。人々の生活が見える情景を多く描いた、作者らしい画題。

第4章 晩年 郷里での活動

戦後の南は、日展への出品を通じて中央画壇と関わる一方、展覧会の審査や講演活動、文化団体の役員就任等を通じ、地域文化の復興にも貢献しています。

作画においては、瀬戸内の海景や農村風景を好んで描くとともに、版画家・永瀬義郎(1891-1978)が会長を務める芸南文化同人会に参加。写生に訪れた現在の東広島市風早地区で、同地疎開中の永瀬と出会った南は、以後、展覧会や写生旅行を通じて同人たちと交友。また永瀬とともに参加した観光地選定の船旅では、島々を巡りつつ各地をスケッチし、戦中に要塞地帯と化して閉ざされていた瀬戸内が、再び取り戻した穏やかな多島美を、伸びやかな線描と瑞々しい彩色で描いています。

若き日の南は、瀬戸内特有の鮮やかな土の色や「クリスマスの木に蝋燭を点じた様な蜜柑畑」に目をとめ、とりわけ春から初夏にかけて輝く豊かな色彩を好みましたが、それらはいずれも戦後の作品を彩り、温もりある画面を生んでいます。創作の原点ともいえる郷里に帰った晩年は、瀬戸内の変わらぬ美しさを改めて見つめ直す時代でもありました。



《曝書》1946年 油彩・画布 広島県立美術館

安浦の自宅を描いています。虫干しのさなか、書物を眺めるのは画家の孫。豊かな色遣いと温和な作風で知られる作者の晩年の代表作。



《生家の近く》1949年頃 油彩・画布 個人

安浦の自宅近くにあった白壁の酒蔵を中心に描いています。空一面に広がる雲が、静かな夜景に変化と存在感をあたえる、最晩年の意欲作。

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。

press release

【関連イベント】

講演会 1（共催：広島県立美術館友の会）

テーマ：「南薫造とその周辺」

講師：倉橋清方（元・呉市立美術館長）

日時：4月24日（土）13:30～15:00（開場13:00）

場所：地階講堂

※聴講無料、要事前申込（当館082-221-6246）

講演会 2

テーマ：「色彩画家・南薫造の生涯と芸術」

日時：5月22日（土）13:30～15:00（受付開始13:00）

講師：藤崎綾（当館主任学芸員）

場所：地階講堂

※聴講無料、要事前申込（当館082-221-6246）

学芸員によるスライドトーク

日時：5月14日（金）、5月21日（金）、6月11日（金） 各日 11:00～、18:00～

所要時間：約40分

場所：地階講堂

※聴講無料、要事前申込（当館082-221-6246）

インスタライブ配信

当館公式インスタグラムからギャラリートークを配信



公式インスタグラム

【県美×ひろ美 相互割引】

「没後70年 南薫造 日本の印象派」の会期中、2館で相互割引を実施！

下記の特別展チケット（半券可）を受付にご提示いただくと、本展当日料金より100円割引。

詳しくは各館にお問い合わせください。

※1枚につき1名様限り、他の割引との併用はできません。

ひろしま美術館（中区基町3-2[中央公園内]）／TEL 082-223-2530）

「がまくんとかえるくん」誕生50周年記念アーノルド・ローベル展

2021年4月3日（土）～ 2021年5月23日（日）

press release

【南薫造の生家 南薫造記念館】

南薫造記念館で、本展覧会のチケット(半券可)を受付にご掲示いただくと、オリジナル絵はがきがもらえます。

南薫造記念館 (呉市安浦町内海2丁目13-10 / TEL 0823-84-6421)

没後70年 南薫造展Ⅱ 愛しき人・親しき風景

2月24日(木)～5月30日(日)



アトリエ

【縮景園連携】

ワンコイン縮景園 本展入館券のご提示により、100円で縮景園にご入園いただけます。

press release

没後70年
南 薫 造

日本の
印象派

【開催概要】

メインタイトル：没後70年 南薫造

英語名：Minami Kunzo Seventy Years On

会 期：令和3年4月20日(火)～6月13日(日) 休館日：月曜日(ただし祝日の場合は開館)

開館時間：9:00～17:00(金曜日は20:00まで開館)

※入場は閉館の30分前まで

料 金：一般 1,400円 高・大学生900円 ※中学生以下無料

※前売り・20名以上の団体は当日料金より200円引き

※学生券をご購入・ご入場の際は学生証のご提示をお願いします。

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳及び戦傷病者手帳の所持者と介助者(1名まで)の当日料金は半額です。手帳をご提示ください。

前売券販売所：広島県立美術館、セブンチケット(セブンコード 087-768)、広島市・呉市内の主なプレイガイド、画廊・画材店、ゆめタウン広島、中国新聞社読者広報部などで販売しています。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館情報に変更の生じる場合がございます。最新情報は広島県立美術館(電話・HP・SNS)まで

開催クレジット

主 催：広島県立美術館／イズミテクノ／NHK広島放送局／NHKエンタープライズ中国／中国新聞社

後 援：中国放送／広島テレビ／広島ホームテレビ／テレビ新広島／広島エフエム放送／FMちゅーピー

76.6MHz／エフエムふくやま／尾道エフエム放送／FMはつかいち76.1MHz／FM東広島89.7MHz

協 賛：大田鋼管／広島県信用組合／一般財団法人ケンシン地域振興財団

地域連携協力：くれしん芸術文化財団、南薫造記念館、安浦町まちづくり協議会、呉市立安浦小学校

制作協力：NHKプロモーション

問い合わせ先：広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail：iroeuma2@gmail.com

担当：学芸課 藤崎 綾

広報担当：総務課 一色 直香、弘津 かおる